有限性の方へ

第三回　見田宗介の『現代社会の理論』

加藤典洋

7　全体理論の必要（承前）

見田の『現代社会の理論』が行ったことは、ここまで述べてきた『ゆたかな社会』と『沈黙の春』以来の二つの近代二分論の流れをはじめて一つに「統合」したことである。そして、そこから現れるべき「問い」に、はじめて言葉を与えた。

彼のいう「現代社会」とは高次化された近代社会のことである。ポストモダンという言葉はほとんど使われていないものの、彼の現代社会論もまた自覚された近代二分論の枠組みのなかにある。一読すればそれが一五年遅れて現れたポストモダン＝第二近代の論だとわかる。それは、ポストモダン思想に引導を渡す最後のポスト近代（モダン）論なのである。

ポストモダン思想のもつ「不能性」も、「超越性」も、ボードリヤールにふれる形で、的確に見届けられている。見田はいう。

> ボードリヤール自身は、肯定を禁止しつづける言説、――具体的な何かを肯定することによって自己の言説の超越性を危機にさらすということを回避しつづける言説という、「ポストモダニズム」の一つの流儀の典型的な著作者だから、生産主義的な諸理論を批判する時も、「消費社会」自体に対するシニカルな距離の姿勢をくずしていないが、バタイユの消費社会論をふまえたボードリヤールが、現代の消費社会に対する基本的に肯定的な言説たちの開花に道を開いたことは明らかである。（一二六頁）

見田によれば、ボードリヤールが他者と関係をもつことに関し「不能」なのは、その書くものが「肯定を禁止しつづける言説」だからである。それは、「何かを肯定することによって自己の言説の超越性を危機にさらすということを回避しつづける」典型的なアイロニー（自らを仮面の裏に隠す）的な言説なのだ。他者と関係をもつとは、自己の相手に対する関係的な超越性を危機に瀕させることである。小林秀雄がかつて述べたように、女と同棲すると人は日々欲望を喚起されるが、すげなく拒絶されることで自分が単なる男にすぎないことを思い知る（「Xへの手紙」）。クールなままで人は他者とはセックスできないのである。しかし、全体としてそのアイロニカルな言説は、役割を果たす。言説は部分的機能に富むからである。ちなみにここは、本文中「ポストモダン（ポストモダニズム）」という言葉が現れる唯一の個所でもある。

全体で四章からなるうち、消費化社会について述べる第一章は、

> 「現代社会」の特質として多くの人によって語られてきた、「ゆたかな」社会、消費化社会、管理化社会、脱産業化社会、情報化社会、等々という徴標（しるし）の群れが、人間の歴史の中で、初めて全社会的な規模と深度とをもって実現されたようにみえたのは、一九五〇年代のアメリカである。（二頁）

と書き出され、一方、その「限界問題」について述べる第二章は、

> レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（Silent Spring）は、環境問題、公害問題の「古典」と考えられている。事実それは、資源、エネルギー問題を含めて、広義の「環境」問題について、世界的に広く読まれ、広範な影響をもった一連の標準的なテキスト（中略）の端初をなすものであった。（四四頁）

とはじまっている。一九五〇年代のアメリカの論としてあげられているのは、そのまま前回ふれたリースマンの『孤独な群衆』であり、ガルブレイスの『ゆたかな社会』でもある。

「北」の「ゆたかな社会」＝情報化／消費化社会の転回の章で論じられるのは、一つには、それが人間にとって何を実現したのかということだ。見田は「冷戦の勝利」に関してただ一つ重要なのは、それが米国の「軍事力の優位による勝利ではなかった」ことだという。軍事力では米ソ両陣営は「膠着の状態」にあった。「膠着をつき崩したのは、『自由世界』の、情報と消費の水準と魅力性」、――「人間の自由を少なくとも理念として肯定しているシステムの魅力性」であった。

> ビートルズもディランもサンタナも、あの輝きと歓喜に充ちた七〇年代コミューンの日々も、この現代の情報消費社会の水準に支えられていた。情報と消費のシステム自体へのあらゆる批判と反発を許容しさえする「豊かな社会」と、その自由とに支えられていた。（二三頁）

ソ連の体制は、米国の世界戦略に敗北したのでも、自由主義のイデオロギーに敗れたのでもない。そうではなく、戦略やイデオロギーの対極にあるもの、そしてまたポストモダンふうのアイロニーからも遠いもの、ビートルズの音楽が象徴する何か、「ゆたかな社会」と、その自由のもつ幸福感に敗れた。そしてその「自由」と「幸福」の追求の基盤こそが、「ゆたかな社会」の実現したものであった。

ではなぜマルクスが搾取のシステムだと述べているにもかかわらず、資本主義は、人に幸福を与えうるのか。見田はマルクスの論理を、次のように反転している。

「家畜が餌を食うことは家畜自身のよろこびであるからといって、それが資本の再生産過程の一環であることに変わりはない」。『資本論』のマルクスはこう記している。ここでマルクスは、大衆の消費の過程のことを語っている。

ここでマルクスの言っていることは正しいけれども、この命題は、同じ資格で、反転してみることもできる。つまり家畜が餌を食み、生殖欲求をみたすということは、牧畜業者の資本の循環の一環をなすからといって、それが家畜のよろこびであることに変わりはない、と。あるいは〈大衆が消費することは、それが資本の増殖過程の一環をなすからといって、それが大衆自身のよろこびであることに変わりはない〉と。(三六〜三七頁)

近代と資本主義システムは、それがどのような「悪」をもたらしてきたかと見れば、それなりの答えがえられるだろう。資本主義は労働者を搾取することで運用されるシステムであり、貧富の差を拡大したからだ。しかし、それが同時にどのような「善」を実現してきたかと見ても、やはりそれなりの答えをえられる。資本主義は人々が広範に「貧困」の絆から解放される、はじめての可能性を意味したからである。外から見れば、人々は消費を通じても搾取されているのだが、人々から見れば、だからといって、それが「よろこび」であることに変わりはない。見田は、その二重性に立ちどまらなければならない、というのである。

彼が「ゆたかな社会」＝情報化／消費化社会にふれて明らかにするもう一つの点は、それが「生産から消費へ」と軸足を転換した社会に見えて実は生産の限界突破の姿にほかならなかったということである。

彼は、ガルブレイスの「ゆたかな社会」の論とボードリヤールの消費社会論とを、消費が産業社会に重要なファクターとして登場する最初の場面、つまり七〇年前後でも一九五〇年代末でもなく、一九二〇年代のアメリカまで遡って検討し直す。

そこで取りあげられるのは、二〇年代のフォードとGMの販売戦略である。彼によれば二〇年代の米国の自動車製造業界では当初、先行するフォードがその生産面、性能面、価格面で断然、後発のGMを引き離していた。しかし、その製品「T型フォード」が低価格化に成功し、多くの消費者の手にゆきわたると、今度は消費者がなかなか大量生産方式の画一化された車に手を出さなくなる。T型フォードの成功が「T型フォードではもはや満足のいかないような豊かな市場をつくり出してしま」い、自動車は「つくることよりも売ることの方がむずかしい商品」になる。そしてやがて後発のGMが「デザインと広告とクレジットを柱とする」新しいタイプの販売／生産戦略を導入し、さまざまなスタイルの車を供給すると、フォードを駆逐し、「T型フォード」は売れなくなり、生産中止に追い込まれる。この「生産のシステムの内部」におこった「現代的転回」の年が、一九二七年であったという。

GMは、いわば情報を製品に組み込み、消費者の購買意欲を掻き立てることでフォードを打ち負かすのだが、これは別にいえば、フォードが乗り越えられなかった需要（消費）の限界を、いわば広告宣伝戦略を導入し、消費を自ら創出することで乗り越えたということである。

産業資本が生産力を増し、社会からの供給（生産）の要求を満たす段階に達すると、次に需要（消費）の壁がやってきて、それ以上は売れなくなる。つまり消費とは生産にとって最初に現れる限界であり、外部なのである。この限界を超えるにはどうするか。生産主体が、今度はモノだけではなく、需要（消費）をも作り出せばよい。いち早くこの方向に舵を切り、「デザインと広告とクレジットを柱とする」販売で消費者の欲望を喚起し、デザインで差別化をはかったGMは、性能はよいが画一的なフォードをあっという間に抜き去る。見田によれば、「情報による消費の創出を常態とする時代」はこのようにしてはじまっている。

さて、ここまでの見田の指摘は、ボードリヤールの消費社会論とそれほど違わない。このエピソードを彼は内田隆三の一九八七年の著作『消費社会と権力』、デイヴィッド・リースマンの一九五六年の論文「アメリカにおける自動車」（エリック・ラーラビーとの共同執筆、『何のための豊かさ』所収）から引き取る形で取りあげており、内田、リースマンが指摘しているのも、ここに「生産から消費へ」の離陸が見られるということである。しかし見田は、先行者たちがおしなべて「生産から消費へ」の変化の指標として扱うものを、そうであると同時にこれは、「（富の）生産から消費（の生産）へ」という生産の無限進行の限界突破でもあると、意味的に再転回＝反転させるのである。

この消費の創出戦略によって産業資本は、自分で供給（生産）と需要（消費）の双方を創出するようになり、たしかに「生産から消費へ」と軸足を変える。しかしそのことにより、実のところ産業生産上の無限進行に向けたオールマイティを手にしている。いわば無限に進展してゆける生産空間の獲得。見田はこれを自己準拠系と呼ぶが、産業資本は以後、自分で自分に必要なものを用立てて（この場合消費）自分だけでやっていくことのできる自立的システム＝自己準拠系を確立する。もう一つ長い視野から見れば、古典時代の産業システムは、こうして需要（消費）をも自ら〝生産〟することで第一の有限性の壁を超える。

ところで、このことの意味は何か。「生産から消費へ」ということだろうか。見田はいう。

> 古典的な資本制システムの矛盾――需要の有限性と供給能力の無限拡大する運動との間の矛盾、これが「恐慌」という形で顕在化することによって、「資本主義の矛盾」の典型的な証明として語られてきた――この基本矛盾を、資本のシステム自体による需要の無限の自己創出という仕方で解決し、のりこえてしまう形式が、〈情報化／消費化社会〉にほかならなかった。（『現代社会の理論』三〇頁、先の二個所の傍点は引用者）

したがって、

〈情報化／消費化社会〉は、誤解されているように、「純粋な資本主義」からの逸脱とか変容ではなく、〈情報化／消費化社会〉こそが初めての純粋な資本主義である。（同前、三一頁）

明示化こそされていないものの、ここで見田は、消費化社会の到来の意味は、「誤解されているように」――つまりリースマンからボードリヤールにいたるまでの論者がおしなべて誤解してきたように――、「生産」中心の産業システムから「消費」中心の産業システムへという「純粋な資本主義」からの「逸脱とか変容」と見るべきではないのだという。それはむしろ「生産」をより貫徹させるための第一の限界（消費という限界）の乗り越えなのだ。リオタールのいうように消費社会は資本主義の「貧困からの解放」という「大きな物語」からの逸脱だというより、その貫徹なのであり、そうであればこそ、そこに「解放」がビートルズやディランの音楽――幸福感の創出――として実現されている。ポストモダン論にいう「生産から消費へ」とは、厳密にいえば「富の生産から消費の生産へ」という産業システムにおける軸足の移動にほかならず、「生産」は「消費」に取って代わられているどころか「消費」を呑み込んで自分をより太らせている。したがって第二の近代（消費）は実は第一の近代（生産）の貫徹された完成形である。これが見田の消費化社会論の骨格なのである。

するとどうなるだろうか。

「消費社会」の本源は、「無限の進展空間」を手に入れた「生産社会」ということだ。それは洗練された外観をもち、内部をどこもかしこも繊細な皮膚に覆われている。しかし、そのことは、この柔らかな皮膚に包まれた実体が同時に自らの外部を繰り込んで無限に膨らんでいく獰猛さを持ち続けていることを否定しない。だとすればそれは、その果てで外部的な限界にぶつからざるをえないのではないだろうか。

「ゆたかな社会」、またポストモダン思想の「生産から消費へ」の論が、油じみてリアルな産業近代から洗練されてヴァーチャルな産業近代への転換という様相で語られ、内部の変容に目を向けさせ、その膨張性から目をそらさせる働きをもつのに対し、見田は、その見方は浅い把握にすぎず、よく見ればここには生産原理が貫徹されているのだという。そしてそれゆえ地球の有限性という外部的限界との衝突が不可避となる。こうして彼は、ポスト近代（モダン）、つまり現代社会が消費社会の内部だけでなく、その外部をもつこと、そこまでを視野に取り込まなければ、この新しい社会の全貌は捉えられないという所以を明らかにするのである。

見田は、ここで何をしていることになるのだろうか。

私の答えをいえば、開放系の近代二分論の論理の歯車を、はじめてその遠く離れたカウンターパート、閉塞系の近代二分論の論理の歯車に噛みあわせている。なぜそういうことが

可能なのかといえば、彼は問題をゼロ地点まで立ち返らせて考えている。私たちは社会が人をどのように動かしているのかと、メタレベルに立って鳥瞰することができるが、その展望は、見下ろされている者の体感によって検算されなければ、人を動かすものにならない。見田はビートルズ、ディラン、サンタナの名をあげ、「自由」と「幸福」の魅力性（とそこに顔を見せている未来に向けての原的な可能性）がソ連を崩壊させたというが、そう指摘させているのは視点の転換というよりは、人間観、近代観の違いである。

彼はこの社会論のただなかに、人は何のために、何をめざして生きるのか、という問いを投げ込む。それが、ポストモダン論者と「成長の限界」論者の双方が行っていないことなのだ。そしてそれが触媒になって、彼の論のなかで二つは「嚙み合わせられ」、たがいにふれ、衝突し、化学反応を起こすようになる。そうして、ここまで見てきた二つの近代二分論の没交渉の壁がベルリンの壁よろしく壊されている。すると、ここにもう少し具体的な、一つの問いが浮かんでくる。すなわち、

情報を禁圧するような社会、消費を禁圧するような社会に、われわれは魅力を感じない。〈自由〉をその根本の理念としないような社会に、われわれは魅力を感じない。けれどもそれならば、情報化／消費化社会のシステムの原理からして不可避であるかのようにみえるこれらの不幸と限界（環境の限界／資源の限界。南の貧困／北の貧困）を、どのような仕方でのりこえることができるだろうか。（二二三～二二四頁）

この本にはそれに類することは何も書かれていないのだが、この本を書くまでに見田の考えたことが、前章で私が述べてきたようなことがらであっただろうことは、疑いなさそうに思える。どこまで自ら意識していたかは定かでないが、その思考は明らかにそれだけの射程をカバーしている。冒頭近く、「はじめに」に、彼は述べている。

現代の社会の理論は、この現代の情報化／消費化社会の、光の巨大と闇の巨大を、ともに見はるかすものでなければならない。

情報化／消費化社会の「光の巨大」に目を奪われる「現代社会」の華麗な諸理論は、環境、公害、資源、エネルギー、南北の飢餓や貧困の巨大な実在と、それがこの情報化／消費化社会のシステムの原理それ自体がその「臨界」に生成する問題系であることを正面から見ようとしない。反対に、現代世界の「闇の巨大」を告発する多くの理論は、この現代の情報化／消費化社会の、人間の社会の歴史の中での相対的な優位と魅力と、その未来に開かれてある原的な可能性とを見ようとしない。

現代社会の全体理論は、この情報化／消費化社会のシステムの基本的な構造とダイナミズムと、矛盾とその克服の基本的な方向を、一貫した統合的な理論の展開として、太

い線で把握するものでなければならないだろう。（「はじめに」ii頁、傍点引用者）

『ゆたかな社会』にはじまる新産業社会論、ポストモダン思想と『沈黙の春』にはじまる「成長の限界」の論理、ポストコロニアリズムの論調がたがいに没交渉のままに論理を発展させ、すれ違いを続けてきたことの意味が、ここには「光の巨大」の論理と「闇の巨大」の論理のすれちがいとして取り出されている。

なぜ『ゆたかな社会』におけるガルブレイスの指摘は、ボードリヤールの消費社会論に批判的にひきつがれ、精緻化され、変容をとげたあと、とだえてしまうのか。またなぜ『沈黙の春』におけるレイチェル・カーソンの警告は、『成長の限界』となって世に広まり、世界の「心ある」一部の人々に強く働きかけるのに、結局彼らを孤立させてしまうのか。

それは、彼らの理論が、一方の問題だけに目を奪われて、その対極にあるものを視野にとらえきれていないからである。あるいは、その対極にあるものと、向きあうだけの勇気をもてないでいるからである。そのため、『成長の限界』の論理は、社会学的にいうと、内田いうところの一九二〇年代の「フォードの機能主義」と変わらない「ヴェブレン的な実用主義の精神」と「禁欲主義」、つまり「『消費社会』の一歩手前のところ」にとどまったままとなる（『消費社会と権力』）。一方、ボードリヤールの消費社会論は、地球の有限性に対しては脳天気なまでに楽天的な、シニカルかつアイロニカルな言説に安住したままなのである。

しかし、大本の原因はその先にある。人はなぜ、生きるのか、という「問い」を欠かしているというのがその答えだ。そのため、彼らの理論はそれぞれに、本当ならそこから生まれてくるはずのそれに続く「問い」を、生まない。自説に自足する。この長年の不毛は、ここに横たわる問題を一つの問いに結晶させるには、最初にある基本的な問い、人は何のために生きるのかという誰のものでもない――それゆえ誰にも属する――問いを、手放してはいけないことを語っているのである。

8　持続的成長と「矛盾」

見田の『現代社会の理論』は、第二章で「成長の限界」の論理について考えている。ここでもはっきりしていることは、その「地球の有限性」の考察が、どう「自由」を理念とする社会システムの「魅力性」を損なわずにそこにある「矛盾とその克服の基本的な方向」を見定められるかという、「成長の限界」の論理とは明瞭に異なる姿勢に貫かれていることである。

「成長の限界」の論理は、簡単にいえば、このままいけば遅かれ早かれ、地球は限界に達する、われわれは一刻も早くその対策に立ち上がらなければならない、というシンプルな形をしている。それは一言でいって禁欲的、機能主義的なリニアル（直線的）な論理であり、このことはこの論理の根幹が、いわゆる「システム分析」によって作られていることを思い出させる。『成長の限界』は、七二年に最初の版が刊行されて以来、九二年に第二版『限界を超えて―生きるための選択』が、二〇〇四年に第三版『成長の限界　人類の選択』が出ていて、その時点での現状評価と将来再予測を行っている。この考えに従い、第二版以降は、その対策として、現在の大量消費・大量廃棄型成長から、小消費・小廃棄の「持続可能な成長」への転進、変革がより具体的に提言されるようになるが、改変の基本は同様の分析に基づくアプデート版のままである。

これに対しては、近年、その四〇年前以来の予測は外れたのではないか、というような指摘がさまざまな場所でなされている（たとえば『フォーリン・アフェアーズ』二〇一二年七月・八月号のビョルン・ロンボルグ「環境心配性の今昔　ローマ・クラブの問題と今日の課題」（"Environmental Alarmism, Then and Now"）など）。『成長の限界』は第二版ですでに第一版で予測した「限界」のいくつかは「超えられてしまった」と述べているから、そこでの対立は明瞭である。

『成長の限界』の判断はこうである。七一年の分析では資源、環境の限界の到来を「数十年後」と見ていたが、九一年にコンピュータ・モデルをもう一度走らせ、データを検討してみたところ、技術改良、環境対策がはじまっているにもかかわらず、「多くの資源や汚染のフローがすでに持続可能性の限界を超えてしまっていることがわかった」。

われわれはこの結果に驚いた。しかし、心底驚いたわけでもなかった。われわれはこのことを心のどこかで知っていたのだ。なぜなら、森林の木々がなぎ倒されていくのを、農地が雨水に浸食され、後に乾いた溝だけが残されるのを、そして川が汚泥で茶色く濁っているのを、この目で見てきたのだから。（中略）研究グループのなかから、世界は「限界を超えてしまったのではないか」という意見が出た時、誰も反論する者がいなかった。（iv頁）

これに対し、批判は、『成長の限界』の想定した資源、環境、人口、食糧、工業力のそれぞれの数字が、その後のさまざまな営為によって大きく動き、もはやその意味を変えているのではないか、と幾多の具体的な例をもってこの判定に疑問をつきつける。たとえば新しい地下資源が発見され、これまでにない掘削技術が開発されて化石資源の可採埋蔵量は逆にふえているくらいである。また、（革命的とまではいえないにせよ）新たに画期的な技術革新が数多く実を結んでいる。さらに、環境汚染や工業生産による廃棄物の増大もそれほどは進んでいない、等々。しかし、これらの批判も、よく読んでみればほとんど『成長の限界』とその論理と見通しを共有している。このままいけば化石資源はなくなり、環境は負荷に耐えられなくなるだろうという『成長の限界』のメッセージと論理的な前提は否定されていないばかりか、そのまま追認されてすらいる。反論の中身は、その「限界」までの猶予がこれこれの理由から一〇〇年から三〇〇年、伸びると

いうにすぎず、また、限界をすぎた（overshoot）というが、われわれは現に元気に生きているではないか、何も起こっていないではないかという体感であるにすぎない。

したがってここにあるのは、一つには「限界」ということに対する理解の違いであり、もう一つには同じ論理内での色調の違いである。『成長の限界』の著者たちの考えでは、限界を超えたからといって、私たちはすぐに死ぬわけではないし、目に見える形ですぐに何かが起こるわけではない。一日で倍増する睡蓮を浮かべた池があるとする。それが三〇日で一杯になるとする。そしてそれが半分を占めるまでは、まだ刈らなくともよいだろうと判断するとする。すると睡蓮の成長がはじまってから何日目に私たちはその「限界」に気づくことになるか。二九日目だ。「あなたは、あなたの池を救うのに一日しか残されていない」。こんなたとえ話を『成長の限界』第一版の著者たちは引いている（一七頁）。死の過程は、最後は劇的だが、それまでは気づかれないほどの緩慢さで開始され、進行する。たとえば一〇〇年から一五〇年というようなスパンで。そして現にその過程ははじまっている、というのがこれに続き、第二版が新たに提出することになる「限界超過（overshoot）」という新概念の意味なのである。

私たちの体感も、米国でシェールガスの掘削技術が発明され、お金はかかるが石油資源の枯渇が数百年のびたと聞けば安心こそするものの、これで『成長の限界』の論理が無効になったなどと結論するところからほど遠い。「われわれはこのことを心のどこかで知っていたのだ」という『成長の限界』の著者らの言葉が心に重く響く。環境破壊が進行し、天候異変が続き、日本でいえば原油価格が七〇年代の二五倍にもなって日々の経済を逼迫させているという事実などを前に、各論としては『成長の限界』の著者たちも、これに反証する逆の例をいくつも用意できるだろうくらいには、考えるのである。

批判者たちの論理が『成長の限界』の主張に対する根底的な批判とならないのは、そこでの議論の前提が『成長の限界』の論理そのままだからである。しかし同じなのは、考え方の前提だけではない。そこに駆使される論理、考え方それ自体が、変わっていない。というより、同一なのだ。それらはともにコンピュータを駆使したシステム分析ないしそれに類する算術的思考に支えられ、機能主義的である。その結果として、ここから得られる処方箋は、暗色系の単一の禁欲主義に染め上げられる。『成長の限界』とそれへの反論は、この暗色系に対する明度の反乱という関係式で、ほぼ説明が可能なのである。

しかしそうであれば、「成長の限界」の警告はこの禁欲主義を基調に、今後もいまの形で生き続けるだろう。ではわれわれはどうすべきか、何をなし、何をなさざるべきかという問いは、それが、いまか、しばらく先のことかの違いこそあれ、人類に差しだされた第一級の「課題」として有効であり続けるだろう。でもこの問いが働きかける対象は、これまで同様、人類の一部の「意識的な層」にとどまり続けるに違いない。それは、国際機関と政府を動かし、国際ジャーナリズムの一部を賑わせるかもしれないが、しかし本質的に、コップの中の嵐という位置づけを出ないのである。

これに対し、見田の差しだしている「成長の限界」の論理への問いは、このゲーム規則の根幹にふれている。「成長の限界」の論理は、地球はいつか限界に達する。これに備えなければならないという。しかしこのようなリニアルな「当為」の論理、あるいは禁欲的な姿勢で、人は「生き生きと」生きていけるのか。見田はそう問うからである。

「成長の限界」の論理が提言する「持続的成長」とは、次のような考え方である。

「持続可能性」について、第三版の『成長の限界　人類の選択』の著者たちは、それが第一版の刊行時にはまだ現れておらず、第一版では「均衡」という概念でいいあてようとしたものが「持続可能性」に変わったことを明らかにしたうえで、「持続可能な社会とは、世代を超えて持続できる社会である。その社会を維持している物理的・社会的システムを損なわないだけの先見性と柔軟性、知恵を備えた社会である」との定義を与えている。しかし、この考え方の核心を伝えるのは、続けて彼らが紹介する、八七年にこの概念を創出したブルントライト委員会（環境と開発に関する世界委員会）の手になる、

持続可能な社会とは「将来の世代が、そのニーズを満たすための能力を損なうことなく、現世代のニーズをみたす」社会である。（三二四頁）

という「印象深い言葉にまとめ」られた定義のほうだろう。それは、未来にやってくるものの「ニーズ（必要）」を満たすことを最低要件とし、これを損なわないという条件のもとでいまいる者の「ニーズ（必要）」を満たすことをめざす、そういう成長の提言なのである。

しかし、この「成長の限界」の二〇〇四年の提言で、私が先に一九七二年の『成長の限界』の冒頭に示された人間観に指摘した狭さ、浅さの問題は克服されているだろうか。

克服されていない。問題は、引きつがれている。

この「持続可能性」の定義を読んで、ほんとうにそれでよいのか、という反問が口をついて出るのは、そこに、あの「人はパンのみにて生くるにあらず」という人の生きることに関するイエスの言葉への応答が、見あたらないからである。人はなぜ生きるのかという問いが、含まれていないからである。もしその問いがここに投げ込まれているなら、定義はどうしても一種「矛盾」を内蔵したものとならざるをえない。なぜそうなるかといえば、それが『成長の限界』の警告する「有限性」という新しい要素と聖書が述べる「人はパンのみにて生くるにあらず」という古くからある要素の接点だからだ。人はパンだけで生きるのではない。幸福を求めて生きる。欲望と歓喜をもって生きる。そしてそれらの本質は無限ということだ。しかし同時に人はパンがなければ生きていけない。そしていまや「パン」は有限なるものとなった。これが『成長の限界』が新しくもたらした私たちの未来の基本

構図なのだ。すなわちここで地球の有限性と向きあっているのは、人間の「必要」ではない。「欲望」である。見田は述べている。

「必要」というコンセプトはふつう、最も原的なものであるように考えられている。「必要」として一般に社会理論で想定されているものは、第一に典型的には食料、それから、衣料と住居、衛生的な上下水道、基礎的な医薬品、普通教育のための施設や学用品、等々である。「ゆたかな社会」ではこれらに加えて、電話やテレビジョンなども「必要」の項目となる。

しかし、考えてみよう。

これらの基礎的な必要は、何のための必要だろうか。生きるための必要である。それから、快適に、健康に、安心して、楽しく、歓びをもって、生きるための必要である。

見田は、こう続けている。

生きることが一切の価値の基礎として疑われることがないのは、つまり「必要」ということが、原的な第一義として設定されて疑われることがないのは、一般に生きるということが、どんな生でも、最も単純な歓びの源泉であるからである。語られず、意識されるということさえなくても、ただ友だちといっしょに笑うこと、好きな異性といっしょにいること、子供たちの顔をみること、朝の大気の中を歩くこと、陽光や風に身体をさらすこと、こういう単純なエクスタシーの微粒子たちの中に、どんな生活水準の生も、生でないものの内には見出すことのできない歓びを感受しているからである。このような直接的な歓喜がないなら、生きることが死ぬことよりもよいという根拠はなくなる。

どんな不幸な人間も、どんな幸福を味わいつくした人間も、なお一般には生きることへの欲望を失うことがないのは、生きていることの基底倍音のごとき歓びの生地を失っていないからである。あるいはその期待を失っていないからである。歓喜と欲望は、必要よりも、本原的なものである。（一四〇～一四二頁）

必要の底には欲望と歓喜がある。そして欲望と歓喜の本質は、無限だということである。地球の有限性は、人間の「必要」に訴える。しかし、見田がこのくだりに続けていうように、「必要は功利のカテゴリーである。つまり手段のカテゴリー」にすぎない。人を動かし、「必要」に意味を与えているのは、ここで見田が正当にも述べているように、「欲望」と「歓喜」のほうなのである。

だから、ここにあるのは、有限性の世界の中で、人の無限性はどのように生きることができるかという、「折り合いをつけられない」種類の問いである。なぜここに「矛盾」があるのか。もう一度考えてみよう。その理由は、ボードリヤールがいうように、「個人にせよ社会にせよ、ただ生きながらえるだけでなく、本当に生きていると感じられるのは」、ニーズ（必要）を満たすだけではなく、「過剰や余分を消費する」、つまり欲望を生きるときだからである。「自由」の魅力性を生きる、「生き生きと」生きることの底には、欲望という名の無限性がある。ここにあるのは、どう無限性を有限性の器に盛るかという「矛盾」した要請なのだ。

この要請に応えようとすれば、私たちは、「必要」から「欲望」へと歩みを進めなければならない。根本的に、近代と人間に関する考え方を更新することを、求められるはずである。

見田は、右の課題にふれ、バタイユがボードリヤールとは異なる考え方に立つ〈消費〉の〈至高の生〉の説明として、「たとえばそれは、ごく単純にある春の朝、貧相な街の通りの光景を不思議に一変させる太陽の燦然たる輝きにほかならないこともある」と述べている例を引いている。「生き生きと」生きるとはバタイユがいうように、むしろある春の朝、貧相な街の通りで、こうした「太陽の燦然たる輝き」を浴びることでもあるというのだ。それは必ずしも物質的な過剰消費を意味しない。ボードリヤールのいうような物資の購買と消費（consommation）の概念は、バタイユのいう原的な消尽（consumation）の概念とは異なる。似て非なるものだというのである。

そのうえで、バタイユとは「対極的な資質をもつ思想家であるイヴァン・イリイチ」の「自立共生的（convivial）」という概念をひいて、見田は、この矛盾の克服のみちすじは、イヴァン・イリイチによってより論理的に示されているが、それをより深く実現するのはイリイチの道ではなくむしろこのバタイユの道だろう、という。つまり、他に依存せず、他を搾取しない「自立共生的」な生き方を獲得することでわれわれはいまよりも幸福になるのだという洞察をわかちもつことがこの矛盾問題に答える唯一の方法になる。こう述べながらも彼は、なおこのイリイチの「歓びに充ちた節制と解放する禁欲」の道とバタイユの道は、違っているという。二人は違う。なぜなら、

バタイユは、この単純な至福という経験のエッセンスの地に、禁欲の道をとおしてではなく、それとは反対の道をとおして到達している。歓びの追求ということをとおして、ただしほんとうに不羈の仕方で、どんな流通する観念にも拘束されることのない仕方で追求することをとおして到り着いている。（一六八頁）

見田によれば、ここに現れている要請に応えようとすれば、禁欲の道ではなく欲望の道を通って進むことが、より深い応答なのである。私は、ここではこれ以上、見田の考えを追わない。ただ、この見田の考え方に立てば、先の「印象深い」持続可能性の定義は、こういいかえられなければならない。それは、

持続可能な社会とは「将来の世代が、そのニーズを満たすための能力を損なうことなく、現世代の欲望をみたす」ことをめざす社会である。

あるいは、

持続可能な社会とは「将来の世代が、そのニーズを満たすための能力を損なうことなく、現世代の欲望をみたす」社会であり、そういう矛盾の克服をめざすわれわれの目標である。

と、「矛盾」を内蔵する形に、書き変えられなければならないのである。

九四年に公開されたハリウッド映画に、キアヌ・リーブスを主演にヤン・デ・ボン監督が作った『スピード』というパニック映画がある。舞台はロサンゼルス。ある朝、学童を乗せたバスに時速五〇マイル（約八〇キロ）を切ると爆発するようにセットされた爆弾が仕掛けられる。バスは止まることができず、身代金を支払うまで走り続けなければならない。これまでは地震が起こるとか、ビル火災が起こるとか、豪華客船が沈没するとか、つまりコントロールが利かなくなると——車で言えばブレーキが利かなくなると——暴走が始まり、パニックが起こった。ここでは逆に、ブレーキをかけると、パニックが起こる。そこがこの映画の新しさである。

実は、この新しいパニックの形は日本で発明されている。高度成長期をへた七五年に佐藤純弥監督の制作した『新幹線大爆破』という映画がそれである。そこでは、新幹線が時速八〇キロを切ると、爆破するゾとテロリストが国を脅迫し、身代金を要求する。

こうした事実を念頭に、一度私は、この本で見田が新しく示すことになった問いの形を『スピード』的問題構成として語ったことがある（「二つの視野の統合——見田宗介『現代社会の理論』を手がかりに」一九九八年）。ブレーキをかければバス（＝成長社会）は減速する。しかし減速すると爆発するため「ブレーキをかけられない」（＝禁欲的社会に戻れない）。そういう条件のもと、課題をクリアしなければならないという設定のうちにある絶対的な「矛盾」が、見田が先の全体理論から取りだした課題の本質をよく示していると思ったからである。

しかし、この「ブレーキをかけられない」理由は、そのときからだいぶ変わったと感じる。先には、この理由は、「北」の人間が全員、心を入れ替え、エコロジーの実践を行ったとしても、「北」の人間にとってはほどよい成長へと戻ることになるかもしれないが世界全体の生産の成長水準を押し下げることとなり、その結果、「南」の人間を飢餓へと追いやる、そのため「ブレーキはかけられない」とそう、考えられた。しかしいまの理由は、もう少し深い。それは、われわれはブレーキをかけるのとは違う、別の仕方でなければ、この有限性の器に無限性を盛るという「矛盾」した課題を克服することはできないのではないかと、いっているからだ。どう欲望を否定せず、また成長を減速させずに、有限性の課題に応えられるか。それがいま差しだされている問いに深く答えるということなのである。

バスは減速できない。一方、資源も環境も明らかな限界をもっている。ここで可能なことは本来無限の可能性をもち、可塑的である人間の欲望と歓喜の質を、より前方に進化させることだろう。そのためにどうするか。どういうことが考えられるか。先に一瞥した見田の模索をこう位置づけることができるが、そういう問いに答えようとしつつ、見田は、『成長の限界』の最新版が「持続的成長」と呼ぶものが「ゆたかな社会」と「成長の限界」を足して二で割った「中庸」というようなものではありえないこと、「ニーズ」だけですむ話ではないこと、そこにある「矛盾」を直視することだけがそれを「克服」する道に踏み出す第一歩であることを、その本の最後に、示唆しているのである。

9　『現代社会の理論』への不満

しかし、この見事な達成に、何の不満もなかったといえば嘘になる。

そこで「有限性」は、「地球の有限性」と語られ、資源、環境、食糧（人口）、そして南北格差、あるいは北の内部の貧困問題として考察されている。これに対するのは、情報化／消費化社会の「自己準拠系」つまり、「自分で自分を支える」ところのオールマイティの内部空間である。「地球の有限性」と「南北格差」はあくまで外部の問題として現れ、その結果、この問題が「北」の社会にとって外在的なままにとどまっている。そのことが私にはもどかしくもあればまた、不満でもあったのである。

私にはこう思われた。

「北」の消費社会のオールマイティな無限性に、「地球の有限性」が外から迫ってくるだけなら、「北」に住む人間のうち、こうした問題に意識的な人間は、そうだ、こうしてはいられない、と思うかもしれない。でも多くの人びとは無関心のままだろう。これまでの「成長の限界」の論理の限界を超えて、その核心の「矛盾」に一歩を踏み入れたとはいえ、ここにいわれる「有限性」が外部存在であることに変わりはない。しかしこれは外から、あなたも意識的になるべきだと要求、啓蒙することで克服できるようなことがらではない。また要求され、「啓蒙」されて、人がそう思うようなことがらでもない。人を動かすのは「欲望と恐怖」だと『リヴァイアサン』のホッブズはいっているが、人は、自分の暮らしに困難が及んだときはじめて、これを除こうと立ち上がろうとする。そうでなければ、動かないのである。

ところで、こういう場所で、私は極めてプリミティブなこのホッブズの人間理解に信をおく。そこからいえば、人は何を理由に社会を変えようとするか、ということの肯定的で能動的な側面、つまり「欲望」に関してはしっかりと踏み込んでいる見田が、その否定的で受動的な側面、「恐怖」に関し

てはあまり踏み込んでいないことが、私には不満だったのである。

見田のいうように限界が、外からくるものである限り、「北」の多くの人間は、実際に困難が生じるまでは、なに、何とかなるだろう、まだしばらくは「消費社会、情報化社会」は安泰だろう、と思う。また、「南」のことや、自分が死んだ後のことまでは構っていられない、自分の明日のことを考えるので精一杯だという人も、多いのではないだろうか。

ここで断っておけば、私は、このような、「私利私欲」ともいわれるような欲望の原初的ありかた、あのホッブズの徒には権利があると思っている。それは人間にとって、どんな場合も否定されるべきではない、大事な属性であると考えている。属性というより、人間の本質であると考えている。これがあったために、世界史的にいえば、中世の秩序が崩れ、近代がはじまった。「欲望」の関係性起原を唱えたポストモダン思想も、この欲望の原初的単一性を、まだ十分には解体できてはいないと私は考えている。もしここに、このような理念的な「私利私欲」の徒を設定し、「北」の世界に投げ込めば、彼は、オレには「地球」も「南」も関係がないと、——そう、あのドストエフスキーの地下生活人のように、「おいしいお茶」が飲めればそれでいいのだ、とも——嘯くかもしれない。そこで私は、この「私利私欲」の徒をもってしてなお、ああ、それなら問題だ、うかうかしてはいられない、と思わずにはいられないような理路で示されるのでなければ、この見田の課題も、普遍的なものとならないのではないかと考えるのである。

つまり、この有限性は、「北」の消費社会のただなか、産業資本主義の内奥から出てくるのでなければ、弱い。「北」の社会に内在的な、そういう有限性でなければ、説得的でないのではないだろうか。

しかし、話を本論の本来のラインに戻せば、この不満があったので、今回の原発事故は、私をこの見田の考え方にもう一度連れ戻す働きをもった。

私は、三・一一の事故をへて、保険打ち切りなどを見聞するうち、これが産業事故として、ある限界を超えているのではないかと思った。ここに「地球の有限性」ならぬ産業資本システムの有限性が、見田の指摘しなかったような間隙を縫って、露出していると感じた。そこでは「有限性」が消費化社会の無限空間の内側から来ている。

保険がきかない。そういう事態が起こっている。その背後に見田のいう「闇の巨大」とは異質の、産業施設の「リスクの巨大」と予測不可能性という問題が控えている。だとすればたとえ資源が大丈夫でも、環境が大丈夫でも、現在の産業システムは、このままでは立ちゆかないということにもなるのではないか。つまり私は、有限性が「リスク」となって産業システムの屋根を破り、家屋の内側から顔をヌッと突き出すのを、見たのである。

（つづく）